

菊鹿町文化財調査報告 第6集

こめ やま
米の山城跡Ⅲ

——くま び やがた 限部館関連のとりで あと 砦跡——

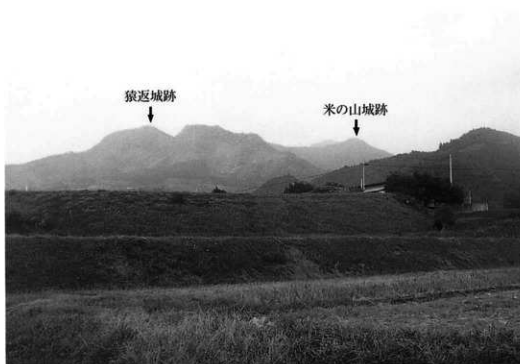
1999年

か もと ぐん くま か まち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

菊鹿町文化財調査報告 第6集

こめ やま
米の山城跡Ⅲ

くま べ やかた とりで あに
隈部館関連の砦跡



1999年

か もと ぐん さく か まち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

ご挨拶



菊鹿町には、国の天然記念物「アイラのトビカズラ」、古代山城「鞠智城跡」、中世城館跡「隈部館跡」という突出した貴重な文化財があります。

アイラのトビカズラは、中国揚子江流域に見られる蔓科の植物で、毎年、春に独特の花が咲きます。遠い海の向こうから、どのようにして、菊鹿の地へもたらされたのでしょうか。大いなるロマンを感じる事が出来ます。国内に、トビカズラの花粉を運ぶ昆虫がいない事から、結実しないという面白い現象もあります。春の開花時には、大勢

の見学者が訪れます。町では、一帯を公園化して、保存と活用を努めています。

鞠智城跡は、国内でも数少ない古代山城の一つで、県の手によって、調査と整備が進められています。平成6年度からの整備も着々と進行し、歴史公園としての体裁が整ってきました。菊鹿の空に映える八角形の復元建物は、いかにも壮大で、古代の雰囲気をかもし出しています。年間の見学者も、年々増加しているとのことで、嬉しく思います。町でも、側面から県の整備事業を支えている所です。

隈部館跡は、我町を拠点として活躍した隈部氏一族の本拠地です。今も上野地区の山腹に当時の栄華が残っています。歴史公園の中に、立石を配した庭園跡や、礎石建物の御殿跡など、どれを取っても一級品の遺構が野外展示されています。県内で500を超える中世城館のトップクラスに位置する遺跡と聞き及んでいます。今後、館跡のさらなる整備も計画しています。この報告書も、その流れに沿ったもので、隈部氏の支配構造を広い範囲から解明する試みです。

隈部館を守った米の山城や猿返城は、高山に築かれた砦であったために、これまで訪れる人も無く、調査の手が入ることはありませんでした。しかし、そのことが遺跡の良好な保存に繋がりました。調査を指導されている大田幸博先生の言葉を借りるまでも無く、砦跡の調査現場は、時の流れが止まったかの様な雰囲気があります。特に、米の山跡の大石塁は圧巻で、霧の中に、その姿が浮かび上がる情景は、まさに中世という感じがします。今にも、大石塁の陰から戦国武将が飛び出してきそうです。

今後の整備につきましては、このような一連の調査結果も取り込んで、広域的な文化財活用を目指しています。祖先から受け継いだ我町の文化財は、きちんとした形で、後世に伝えていく所存です。このことは、町政を預かる私の責務と認識しています。

平成11年3月31日

菊鹿町長 隈部 弘正

序 文

米の山城跡は、隈部館の背後に配置された砦の一つですが、調査が進むにつれて、縄張り構造も徐々に明らかになってきました。何と言っても圧巻の遺構は、山頂直下に築かれた大石塁です。山腹の縁に延々と続く有様は、見る者を圧倒します。調査を指導されている大田幸博先生によれば「謎の石垣で、存在理由が分からない」とのことですが、私も同じ考えです。標高 750m の高山に、何故このような石塁が必要だったのでしょうか。信じがたい隈部氏の大土木工事に、歴史の重みが肌で感じられます。

城跡調査も、第 4 次を数えます。車で林道を上り詰めた後の登山も容易ではありません。その都度、測量器材も運び上げる必要があります。冬場の寒さも、想像以上のものがあると関係者から伝え聞いています。このような努力の結果、今年も貴重な資料を得る事が出来ました。

教育委員会が、先に作成しました『隈部館跡』『猿返城跡 米の山城跡』『米の山城跡Ⅱ』の調査報告書と合わせて、御活用願えますなら、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に従事されました関係者の方々に、厚く御礼を申し上げます。

平成 11 年 3 月 31 日

菊鹿町教育長 平 嶋 靖 弘

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第3節 調査の取り組み	1
第Ⅱ章 城跡の概要	2
第1節 菊鹿町について	2
第2節 上永野村	3
第3節 戦国時代後半について	4
第4節 山城の実態	10
第Ⅲ章 調査結果	15
(1) 平成9年度の調査結果	15
(2) 平成10年度の調査結果	25
第Ⅳ章 ま と め	26

挿 図 目 次

第1図 菊鹿町位置図	2
第2図 菊鹿町地形図および中世城跡分布図	7
第3図 県内の山城	13
第4図 米の山城跡周辺地形図	16
第5図 南西南山腹区域図	17
第6図 平成9～10年度調査区グリッド設定図	19
第7図 平成10年度調査区 上面実測図	21
第8図 平成9年度調査区 石列G 側面実測図	23

表 目 次

第1表 調査の経過表	1
第2表 清潭寺・墓碑名一覧	3
第3表 清潭寺・所蔵物一覧	4
第4表 菊鹿町中世城跡一覧表	9
第5表 県内山城一覧表①	10
第6表 県内山城一覧表②	11
第7表 県内山城一覧表③	12

写真図版

図版 1	猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景（下永野地区から望む）	30
図版 2	猿返城跡・米の山城跡 遠景（高池地区から望む）	30
図版 3	米の山城跡 遠景	31
図版 4	猿返城跡 遠景	31
図版 5	平成9年度調査区 全景	32
図版 6	平成9年度調査区 石列A（グリッド25付近）	32
図版 7	土塁より南西側下方・石列Cを望む	33
図版 8	平成10年度調査区 グリッドB-28より上方を望む	33
図版 9	平成10年度調査区 グリッドC-29より上方を望む	34
図版10	平成10年度調査区 グリッドC-30より下方を望む	34
図版11	平成10年度調査区 グリッドC-28付近	35
図版12	平成10年度調査区 石列G側面 グリッド30	35
図版13	平成10年度調査区 石列G グリッド30より上方を望む	36
図版14	平成10年度調査区 石列G グリッド34より下方を望む	36
図版15	平成10年度調査区 グリッドA-32付近	37
図版16	平成10年度調査区 グリッドA-32付近より上方を望む	37

例 言

1. 本書は、熊本県鹿本郡菊鹿町上永野の高山城に所在する「米の山城跡」の調査報告書である。山頂直下の南西側山腹から検出された石塁の実測調査を実施した。
2. 調査は、菊鹿町教育委員会が主体となって行った。
3. 調査は、大田幸博氏を中心となって行った。
4. 調査に際しては、上永野地区の方々から多大な協力を得た。
5. 本書の執筆は、大田氏が行った。
6. 図面の整理と編集実務は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが行った。
7. 本書の編集は、菊鹿町教育委員会が行った。

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体	菊鹿町教育委員会
調査責任者	平嶋靖弘（菊鹿町教育長）
調査者	大田幸博（熊本県教育庁文化課主幹） 富田弘海（菊鹿町社会教育課係長）
調査事務局	岩井賢太（菊鹿町社会教育課長） 富田弘海
報告書作成	石工みゆき 溝口真由美 大田幸博
調査補助員	永田六三子 青木美知枝 中満宣道 横田 巧

第2節 調査の進展

菊鹿町には、県指定史跡の隈部館跡を初め、高山域に猿返城跡と米の山城跡が存在する。これら3城は、県内で530城を数える中世城跡の中で、トップクラスの館と砦である。山腹にある隈部館跡は、当時を彷彿とさせる庭園跡や礎石建物跡が、良好な状態で残っており、猿返城と米の山城は、非常に高所に築かれた砦として注目される。この様な状況の中で、町教育委員会では、町内に所在する中世城跡について、下表の様な調査を実施してきた。いずれも、町の自主事業であるが、特に、平成8年度からは、隈部館の周辺部に配置された砦跡の調査に継続して取り組んでいる。今年度は、米の山城跡の第3次調査を実施した。

調査年次	調査箇所	調査内容と成果	調査報告書
昭和49年 ～ 昭和51年	隈部館跡	昭和49年3月、中世城跡として、県下で2番目の県指定史跡となった。指定を契機に、3ヶ年計画で、館の発掘調査と環境整備を行った。礎石建物跡と庭園跡を検出したが、遺物は皆無に近い状態であった。	――
平成5年	隈部館跡	昭和49年度の発掘調査は、報告書が未刊であったため、露出展示されている遺物の再計測と城域の測量を実施。	菊鹿町文化財調査報告 第2集
平成7年	鹿取城跡	『菊鹿町史』に城域図面を掲載するため、鹿取城跡で測量調査を実施。	『菊鹿町史』 中世編に収録
平成8年	猿返城跡 米の山城跡	第1次調査。隈部館の周辺に分布する砦跡を調査し、城域の測量図面を作成。米の山城跡で大規模な石塁の存在を確認。	菊鹿町文化財調査報告 第3集
平成9年	米の山城跡	第2次調査。発掘調査を実施し、検出された石塁の計測調査を行う。	菊鹿町文化財調査報告 第4集
平成10年	米の山城跡	第3次調査。石塁の調査を継続して行う。	菊鹿町文化財調査報告 第6集

第1表 調査の経過表

第3節 調査の取り組み

平成10年度は、「米の山城跡」の第3次調査を実施した。これまでの調査報告書にも記したが、現場は、標高755m強の高所で、高木が連なる^{ツツジ}櫛（50年生）の植林地である。夏季でも気温が余り上がらず、樹枝に遮られて日中もほとんど直射日光が届かないため、表土の黒色土に下草の繁茂はなかった。そのため、平成9年度の発掘調査区も、そのままの状態を保たれており、調査の手戻りはなかった。

今年度も例年と同様に町教育委員会が調査主体となり、^{くまもと}鞠智城跡（古代山城：菊鹿町米原）を通じて町と係わりの深い大田幸博氏の指導の元に、関係者が参集して行った。

米の山城跡の調査は3年目を迎え、手順も互いに熟知しているため、スムーズに進行了。前年度に検出した石畳の環境整備を行い、メッシュを組んで、各々、手分けして実測を行った。しかし、石畳は山腹斜面に張り付く形で残っているため、足場の確保が非常に困難で、苦労も多かった。高所ゆえに天気も変わりやすく、気象変化にも気をを使う必要があった。特に、夏場の落雷と冬場の降雪には神経を研がらせた。いつもながら、林道終点地で車を降りた後の現場までの登山は、まさに難行苦行であるが、「今、調査しなければ」という強い信念の元に取り組んだ。大田先生を初めとして、調査作業に従事された永田六三子さん・青木美知枝さん・中満宣道氏・横田 巧氏に厚く御礼を申し述べたい。さらに資料整理と報告書の作成に取り組まれた石工みゆきさんと溝口真由美さんにも深く感謝したい。

それにしても、「何故、この様な高所に中世城が築かれたのか」、疑問は深まるばかりである。「第一、こんな深山に、敵が攻めて来るのだろうか。それにも増して、山腹張り付きの石畳を築く事に、どのような意味があるのか」。こんな会話が休憩時に、幾度となく繰り返された。米の山城の特異な性格が、この会話に集約されている。

〔富田弘海〕

第Ⅱ章 城跡の概要

第1節 菊鹿町について

熊本県の北部に位置し、県庁所在地の熊本市からは約30km離れている。行政域の最大幅は、東西10.9km、南北12.3km、総面積77.38km²。鹿本郡市では、鹿北町に次ぐ広さを有する。南北方向を主軸とした場合、北に広く南に狭い逆三角形となる。行政域の東部から北部にかけて、八方ヶ岳、三国山、国見山などの高山が連なっている。これらは、いずれも標高1000mクラスの高山で、町の北東部は、三国山の宿ヶ峰尾峠を境に福岡県と大分県に接する。県内の行政とは、北西に鹿北町、西は山鹿市、南は鹿本町、東は菊池市に隣接している。下内田地区に位置する町役場は、東経130度46分17秒、北緯33度1分31秒。



第1図 菊鹿町位置図

県境の高山系から流れ出る水は、枝状の侵食河系を作り、これらがまとまって町内の内田川（菊池川の支流）へ注ぐ。「菊池盆地」と称されるように、北方に高山を背負い、南方へ丘陵地が緩傾斜する地勢にある。南端における地形の大変化点は、行政域が菊池市と接する所にあり、丘陵地はそこで終わりを告げる。比高差100m程で、南下には、菊池平野の広がりがある。最も簡略化した地形は、町の東部・北部・西部が分水嶺で囲まれ、南部が菊池盆地に開ける状態にあり、鳥瞰すれば、南側が欠けた楕円の様になる。調査地点の米の山城跡は、八方ヶ岳の南側山系にあり、標高750mクラスの稜線上にある。このラインは、菊池市東部との行政境にあたっている。

第2節 上永野村

木野川の上流に位置する。中世には、菊池氏の重臣であった隈部氏の本拠地。慶長九年(1604)九月の検地帳によれば、田二五町八反四畝余、畑一五町八反二畝余、分米三五三石七斗とある。近世初頭の資料であるために、中世に遡って、隈部氏時代の「農業経営の実態」を伺い知ることができる。近世は山鹿郡中村手永に属した。宝暦の下ヶ名寄帳には、田に「宮ノ下・石切・造音寺・小原・ふる古閑など一八」、畑に「正田平・幸山・西町・小路・早川など一四」、居屋敷畑数に「津留・横尾・原口・犬丸など十」の下ヶ名が見える。『肥後国誌』には、「正田村・犬丸村・横尾村・小路村・原口村・高地村等の小村あり」と記されている。

構口の光厳寺（浄土真宗本願寺）は、京都興正寺の末寺で、天正元年(1573)の開基という（『肥後国誌』）。一方で、池辺紀伊介（大阪石山庵城に参加した顕如の門下生）が開いたとの別説もある。寺には、顕如の書状（織田信長の死を報じた）、加藤忠広の書状（年代不詳）、陣中鏡（隈部親水の愛用品という）、親水の出陣書などが所蔵されている。

清潭寺

曹洞宗で、雲龍山清潭寺と称される。本尊は石造りの阿弥陀如来。開基は不明で、開山は、実底中真（加州の永平寺八世）。相良氏の菩提寺であったものを、後に隈部氏が再興して、歴代の廟寺としたという（『肥後国誌』）。現在の寺は、明治36年に再興されたもので、六角堂が一字建つ。墓所は、寺の西側、林の中にある。①墓の中で完全なものはないが、現在、三基の五輪塔・二基の板碑、六基の無縁塔を数える。判読可能なものは次の通り。

種 類	年 号	法 妙 刻 文
五 輪 塔	天正8年(1580)	喜伯遣悦(隈部貞明の法名)
宝篋印塔	天正14年(1586)	黑山妙鏡(隈部貞明の娘・木野親則の妻といわれる)
宝篋印塔	天正19年(1591)	高峯順天(隈部親家の法名)
宝篋印塔	永禄7年(1564)	齡兵禪寿(隈部親家の母といわれる)
板 碑	永禄8年(1565)	花岳恵薫上座 勘破了位 椿岸於大師
宝篋印塔	永禄11年(1568)	月清妙江(隈部貞明の娘といわれる)
供 養 碑	元亀2年(1571)	奉看読経王一千部月清妙江大師芳菩提為也

第2表 清潭寺・墓碑名一覧

②寺の所蔵物

所 蔵 物	内 容
初登山手習教訓書	永禄10年(1567)に、隈部親永が文武の教えを認めた書。
面 山 の 書	江戸時代に寺を再興した僧の書。
十 六 羅 漢 像	面山作
隈部親永の位牌	隈部氏が滅亡した頃のもので伝えられる。

第3表 清潭寺・所蔵物一覧

③その他(伝承物)

夜泣き石：寺の境内にある。高さ52cmの自然石。

猿返城付近の小石を帯にはさんで持ち帰ると、その石が「かえろ、かえろ」と泣いた事によるという。隈部氏の滅亡の時、当時、3歳の石見丸(親則)が、夜中に城を落去する時に、母恋しさに泣いた魂が、この地に留まったためという。

第3節 戦国時代後半について

(参考文献：『菊鹿町史』の中世編)

(1) 隈部氏について

隈部氏が、菊鹿と直接に関わるようになったのは、十五世紀末頃からである。但し、隈部氏の起源は、大和源氏の宇野親治(大和国宇野荘・今の奈良県五条市)からというのが定説である。山鹿温泉の発見者と伝えられ、山鹿市内や町内に(伝)墓所もある。

親治は、保元の乱(1156)に登場する。この乱は、鳥羽院の没後、皇太子問題を巡って崇徳天皇と後白河天皇の争いに、藤原頼長と忠長の対立が運動したものである。頼長の招きで親治は、京へ向かったが、途中、出会い頭の合戦で捕らえられ、禁獄されてしまった(保元物語)。乱後の処置で、菊池氏に預けられて肥後に下り、後に菊池武房から隈部姓を与えられたという。親治は、程無く許されて帰京したと思われるが、一族ゆかりの者が土着して宇野姓を称し、その流れが隈部氏となった可能性が高い。

「隈部系図」によれば、文永元年(1263)に持直が、菊池武房から「隈部」の家号を賜り、白木村(現・菊池市竜門)に居住した。鎌倉時代末から南北朝時代には、菊池氏との縁戚関係も深まり、赤星氏・城氏と共に菊池氏惣領家の老者の家としての位置を確保している。歴代の中で、最も活躍したのは忠直で、彼は、菊池三代(持朝・爲朝・重朝)の老者であった。系図によると応永三十三年(1426)の生まれで、明応三年(1494)に没している。戦国時代の菊池文化を代表する人物でもあった。隈部町(菊池城の麓集落)の整備も業敵の一つとされている。

隈部宗家としては、武治(忠直の曾孫)の時に、菊鹿・上野の猿返城(隈部館)のことで、「肥後国誌」などの城名の表現による)に移り、本拠地にしたと言われている。築城者については、親家(貞明の子)や親永(親家の子)の両説がある。但し、貞明は、天文八年(1539)に没して、清潭寺(隈部館麓の桑原地区にある)に葬られている所から、この時期、既に隈部氏と当地の関係が生じていたものと思われる。寺の大門口の逆修塔に、「富田安芸守直方敬白 千時大永八年戊子三月廿一日」と記されている。直方は、忠直の系列に属し、父の家光の時から「富田」を称したとされる。相良寺千手観音の厨内名には、「大惣那隈部上総守親氏 大願主富田安芸守直方」とある。この親氏は、永正十四年(1517)に修造されており(肥後国誌)、忠直以来の上総守を名乗っていることから、親氏が隈部氏の家督の地位にあったことが伺われる。十六世紀に隈部氏は、菊鹿に本拠地を大きく拡大したと思われる。

(2) 合瀬川の戦い

弘治二年(1556)、大友義鎮が小原鑑元を攻めた嘉祿の戦いで、木野親政が戦死。親政に嗣子が無かったため、家臣達は、親政の従兄弟であった隈部親永に所屬することになった。その際、隈部氏が所領八十も所望したために、隈府城の赤星親家(道雲)が反発した。これが、菊鹿で行われた合瀬川の戦いの発端である。しかし、合戦の経緯は、確実な資料が皆無で「隈部実記」等の近世の編纂物に頼ざるを得ない。それでも、この戦いで隈部方が大勝して、菊鹿のほとんどが、隈部氏の支配下に入ったことは、間違いない。

(3) 龍造寺氏の肥後への進出

合戦後も、菊池城主の赤星氏は、大友氏の力を背景に、大きな力を持っていた。道雲の没後、親永は、これに対抗するために、肥前の龍造寺氏隆信の助けを借りようと計画し、龍造寺勢を肥後へ手引することを申し入れた。隆信は、天正七年から肥後に攻め込み翌年には、菊池城を攻めた。激戦の末、赤星氏は、城を出て合志の竹迫城へ移ったので親永が新たな菊池城主となった。この事により、肥後の北部は、大半が龍造寺氏の支配に服することになり、隈部氏は、その中心的位置を占めることになった。

(4) 島津氏の北上

天正十二年(1584)八月末から、島津氏の本格的な肥後への進出が始まり、十月初めまでに、肥後北部の国人達は、大方、島津氏の支配下に入った。この間、島津に対し大友方から龍造寺氏を討つように、龍造寺方からは、大友氏を討つようにとの島津氏への働きかけが相互から続けられた。結局、島津は、筑後出兵を諦めて、八代への引き上げを条件に、大友勢の豊後への引き上げを要求して八代へ帰降した。

天正十三年に、大友氏に繋がる甲斐宗運(阿蘇氏の重臣)が没すると、島津義久は、阿蘇氏攻略を決意して総攻撃に転じ、配下の諸城を、ことごとく陥落させた。ここに島津氏の肥後征服が完成した。天正十四年のことであった。

(5) 肥後・九州・中央の動向

肥後では、国衆達が勢力拡大に凌ぎを削り、それぞれの利害関係の中、豊後の大友氏・肥前の龍造寺氏・薩摩の島津氏と結びつき、あたかも草刈り場の様相を呈した。

この頃、中央では、織田信長が覇権を確立した。天正元年(1573)に室町幕府を亡ぼし、中世の権威の象徴であった比叡山の焼き討ちなどを行い、一途、天下人を目指した。しかし、志半ばで、天正十年(1582)に家臣・明智光秀の謀叛に倒れ、その事業は、豊臣秀吉によって継承されることになる。秀吉は、光秀や柴田勝家を滅ぼし、程無く天下人の地位を確保し、天正十三年(1585)に関白、翌年には太政大臣になった。

九州では、島津氏が龍造寺隆信を討ち取り、肥後から大友氏を駆逐した。肥後は、言うに及ばず、豊後半分を支配する状況となったため、大友義統は、秀吉に助けを求めた。大明国まで版図を拡げる野心を持っていた秀吉は、直ぐに反応し、天正十五年三月に十二万の大軍をもって大阪を出発した。この状況に、島津氏は、戦わずして豊後と肥後から兵を退いた。九州に入った秀吉に領主達は次々に参陣し、肥後の国衆達も相次いで服属した。四月には肥後の南関へ入り、五月に薩摩の川内へ至り、島津義久も降伏した。

秀吉は、陣中で佐々成政を肥後の大守とすることとし

一、五十二人の国人先規の如く知行相渡すべき事

一、三年検地有るまじき事

一、一揆起こらざるよう遠慮すべき事

などの制書を与えた。

秀吉は、七月十四日に大阪へ凱旋。二十五日には、完成間近かの築山第に入り威勢を天下に示した。北野の松原で十月一日から、十日間の大茶湯を計画したが、肥後で一揆が起こったらしいという噂が伝わり、大茶湯は一日で終わった。これが、世に言う「肥後の国衆一揆」である。これに対して、九月初めに、秀吉は、毛利輝元を総大将として、九州に領知を持つ小早川隆景・黒田孝高らに出陣を命じた。

(6) 国衆一揆の因となった佐々成政の肥後経営

五十二人の国衆に給地安堵の朱印が与えられた。しかし、旧領の総てが安堵されたもので無く、隈部親永の場合は、一千九百町から八百町に減じられている。これは、旧領の本知分のみに過ぎず、他の国衆も同じ状況にあった。大友氏や龍造寺氏などの戦国大名からの給地分は、豊臣権力の直轄分に組み込まれてしまった。この政策は、国衆と戦国大名の関係を切断するため、統一権力の貫徹を目指すものであった。

一方、佐々成政にとっても、家臣団を維持し、分国大名を展開するには、非常に不十分な状態にあった。財源的には、秀吉権力の直轄分と国衆への安堵分のみに限られた。天正十五年七月一日に、成政は、国衆達を隈本城に招集し、秀吉の朱印状を手渡すと共に、敢えて検地の実施を通告した。この時、隈部親永は、朱印を猶に拒否し、菊池城に立て籠もっている。成政の政策は、国衆を単なる年貢取返者へ転換させることになり当然、国衆達の反発を招いた。

(7) 国衆一揆の展開

①検地政策を隈部親永が拒否。

②成政は、隈本城で能を催し、親永を招き暗殺を企てたが、親永の出席拒否により失敗。

③成政は、七月十日に、菊池城に三百余騎を差し向ける。親永は八百余人で立て籠もる。

④成政は、七月二十六日に六千余騎で押し寄せる。「帰順すれば、検地はしない。人質を出すように」との申入れに、親永が応じる。しかし人質は、返されず。親永は、譜代の家老富田家治・多久宗貞・小場重実らと図って反逆を決意。城村城主の親安も同意して、共同作戦を協議。

⑤成政は、親安に申入れて、両者の分断を図る。

⑥多久宗貞の裏切りと、富田一族の討ち死によって、親永勢では、城兵の逃亡が相次ぐ。百五十余になった親永勢は、城を駆け抜け、親安の陣に加わる。

⑦城村城に立て籠もり。平百姓まで含めると一万五千人を数える。

⑧八月七日に、成政は、城村城に押し寄せ、十三日に激しい戦闘。多数の討死者を出す。

⑨「阿蘇・甲斐・相良の国人が反逆を企てている」との情報もたらされ、成政は隈本城へ引き上げる。

⑩成政は、国侍達に城村城の攻撃を呼かけるものの、応じる者無し。

⑪成政は、柳川の立花宗茂に援助を求める。

⑫立花勢は、兵三千人で十月九日に城村城へ至る。

⑬立花勢は、帰途の際に、大津山・和仁・迎春勢と、追撃してきた山鹿・有働勢と激戦を展開。一揆軍の大敗北となった。

⑭宗茂は、事の次第を秀吉に報告し、十月二十三日に感状を賜る。

⑮大津山氏は神尾城に、和仁氏と迎春氏は田中城に立て籠もる。

⑯成政は、十月二十八日に、兵八千人で田中城に押し寄せる。これに、立花勢、鍋島勢、秀吉が派遣した安国寺恵瓊の軍勢が加わって、田中城の攻囲戦が始まる。

⑰一ヶ月余の戦いの後、迎春親行の裏切りがあって、田中城は落城。

(8) 一揆の後始末

秀吉は、天正十六年の年明けから徹底的な追及を行い、処刑者は、五千七百人を数えた。五月頃から太閤検地を実施し、七月には刀狩令三カ条を発している。これは、時代の一大変化点である。石高制と兵農分離の成立という観点からすれば、肥後の国衆一揆は、極めて大きな意味を持った。

(9) 一揆の隈部氏の動向（出典は、主に隈部系図）

親永・親房は、柳川の宗茂のもとに、親安と蒙元以下十五人は、小倉の毛利勝信に預けられたが、全員、切腹となったと「隈部系図」は記している。一揆後の隈部氏一族は、さすがに武士としての存続は難しく、多くが僧侶となる道を選んだものと思われる。



No.	中世城跡名
1	歸泉城跡
2	山内城跡
3	山ノ井城跡
4	鷹取城跡
5	日渡城跡
6	若宮城跡
7	小野城跡
8	隈部館跡
9	鎌返城跡
10	米の山城跡
11	阿佐古城跡
12	虎ノ城跡

第2図 鞠智町地形図および中世城跡分布図

※鞠智城跡は古代山城。

No	中世城跡名	所在地	城 歴	現 況
1	鶴黒城跡 (参考地)	大字 上内田 字 年ノ春	隈部親水が築城。 城代は二の家老の多久宗貞。 (「古城考」)	文献に城名が記されているが、遺構を伴う城地は確認できない。ただし、「くうのすさん」と呼ばれる比高差80mの山がある。一応、ここが参考地とされる。自然地形のままであるが、見晴らしが良く、磐という感じはする。一山挟んで隈部館の裏側にあたる。
2	山内城跡 (丘城)	大字 山内 字 郷ノ原	隈部親水が築城。 (「古城考」)	「城山」と呼ばれる比高45mの山が城跡。平場、土塁、堀切が残る。郷ノ原地区は麓集落(中世の小規模な城下町)。
3	山ノ井城跡 (丘城)	大字 下内田 字 山ノ井	内田相良氏十一代の居城。 (「鹿本郡誌」)	比高差40mの丘陵末端部が城地で、堀切と土塁が残るが、主郭の造成は甚だ不完全。削平の度合いが低く、城内に古墳も残る。
4	鷹取城跡 (山城・磐)	大字 太田 字 鷹取	東氏三代の居城。 (「鹿本郡誌」)	比高差 120mの山が城跡。城地は、丘陵地帯の東端にあたり、麓集落の大田からも離れている。山頂から内田川流域の迫地が望める。規模は大きくないが、本格的な磐跡。造成された3区画の平場と堀切・土塁が残る。
5	日渡城跡 (大規模丘城)	大字 下内田 字 日渡	隈部親水の家臣であった宮田氏継が城代を勤めた。 (「古城考」)	比高差50mの丘陵が城地。県内でも最大クラスの丘城。広い平場と「矢場」と呼ばれる大土塁や堀切・古井戸が残る。焼米が出土するとされている。
6	若宮城跡 (丘城)	大字 下内田 字 若宮	内田相良氏一族の城。 (「古城考」)	比高差30mの丘が城跡。平場と二重の堀切が残る。昭和53年に県道改良工事で発掘調査を実施。十一世紀代の白磁碗を中心として、承切りの土師碗や皿が出土。発掘調査の所見から、鎌倉時代まで遡る城跡。文献記録を裏付ける結果となっている。
7	木野城跡 (丘城)	大字 木野	木野氏代々の居城。 (「古城考」)	比高差40mの丘陵が城地で、東麓に中世寺院跡が残る。立地集落は麓集落。主郭の平場は残存しているが、畑地開墾整備事業により、周辺部の地形は一変している。
8	隈部館跡 (山城・館)	大字 上水野	隈部氏の居城。 (「肥後国誌」)	山腹に館跡がある。県指定史跡。最も近い麓集落からの比高差は 120m。枡型の虎口石垣、主殿と副殿の礎石建物、根太柱の台所、庭園、大規模な堀切が残る。県を代表する城館跡。隈部氏の本拠地。
9	猿返城跡 (山城・磐)	大字 上水野	城主は隈部親水。 (「古城考」)	標高 685mの高山にある磐跡。隈部館を守る磐と言われている。山頂に大土塁。館に面する山腹側に、土塁を伴う小段が重なる。尾根筋の小谷部に湧水地。
10	米の山城跡 (山城・磐)	大字 上水野	築城者は宇野親徳。 (「古城考」)	標高 755mの高山にある磐跡。現在の登城口でさえ、隈部館から約5.3kmも離れており、登山に約30分かかる。隈部館の「詰め城」「逃げ込みの城」と考えられる。山頂に大土塁と環状石列。山頂直下の山腹に大石列。尾根筋に堀切。
11	阿佐古城跡 (参考地)	大字 阿佐古	城跡名を明記した文献はなく、城主についても不明。	参考地。隈部館の南側の山を城地と呼ぶ人もいる。未調査。
12	虎口城跡 (山城・磐)	菊池市龍門	隈部氏の城。(「古城考」)	八方ヶ岳山系の磐跡。行政域では、菊池市龍門に属するが、かつては隈部氏の持ち城であった。猿返城～米の山城～虎口城と広域的には、一つの尾根で繋がっている。

第4表 菊鹿町中世城跡一覧表

第4節 山城の実態

通常、中世城は、城が築かれた場所の地形から「山城・丘城・平城」の三種類に大別される。最も江戸時代の「慶安の差出」によれば、丘城を平山と表現している事から、「山城・平山城・平城」としても差し支えは無い。ただし、平城はともかく、山城と丘城の区分は、かなり曖昧で、その判断は、調査者の判断に委ねられることになる。土地利用や植栽によっても、景観は大きく違っている。畑地の場合は、丘城に見えるし、植林地に転用すれば、山城に見える。はっきりと区分できるのは、両極端の場合に限られることになる。米の山城と同様に、非常な高所（比高差150 m以上）に築かれた山城は次の通り。

（比高差は四捨五入している）

番号	城名	所在地	比高差	内 容
1	小原城	玉名郡 南関町 小原	180m (標高287m)	〔伝〕小原鑑元（大友義鎮の家臣）が築城した砦。 〔現〕山頂に平場と小規模な堀切。麓に「陣内」「城下」。 近隣麓の奈木野城（小規模な丘城：南関町）とセットをなす。
2	廻野城	玉名郡 南関町 相谷	240m (標高318m)	〔伝〕築城半ばで放棄された砦。 〔現〕南関町と三加和町の境界線上にある。山頂の平場に「二城山神社」。南側山腹は、そのまま麓に至るほどの絶壁。
3	葛原城	玉名郡 南関町 東	200m (標高256m)	〔伝〕大津山氏代々の居城で、加藤時代は、城代が置かれた。 慶長五年(1600)に廃城。 〔現〕山頂に打ち込み刺ぎの石垣。発掘調査で礎石建物跡を検出。尾根筋に「本丸」「二の丸」「三の丸」の平場と、鞍部側に岩場を刻む3本の堀切。石垣が検出された麓ノ原城（中近世城）に先行する本格的な山城。
4	萩原城	玉名郡 菊水町 萩原	180m (標高213m)	〔伝〕内田相良氏が在城し、天文年間に落城。天正年間には、永野氏が居城したが、同七年に隈部氏に攻められて再び落城。 〔現〕本格的な砦で、山頂に土塁。北東側の尾根筋に4つの平場と3本の堀切。麓に「お花畑」の居館跡。
5	日平城	玉名郡 菊水町 日平	270m (標高328m)	〔伝〕小森田氏一族（隈部氏家臣）が居城した砦。 〔現〕山頂に平場。尾根筋に3本の堀切と、井戸跡。麓の靖浦集落に「陣山」「大城戸」。
6	筒ヶ原城	荒尾市 小代	420m (標高501m)	〔伝〕小代氏代々の居城。 〔現〕荒尾市と玉名市を跨ぐ境界線上にある。本格的な大規模山城で主軸尾根筋に「本丸」「二の丸」「三の丸」の平場と3本の堀切。斜面部に空堀と堅堀。府本集落に面する「本丸」斜面に野面積みの小規模な石垣。
7	松木城	阿蘇郡 小国町 中原	180m (標高570m)	〔伝〕城主不明。 〔現〕砦で、山頂に平場と尾根筋に2本の堀切。 麓の低地に「城の道」。
8	慈水城	阿蘇郡 久木野村 河陰	430m (標高838m)	〔伝〕城主は、久木野氏・今倉藏人。 〔現〕城地は「高城山」の岩山。地藏峠を越え、矢部（阿蘇大司の居住地）に至る山越えルートにあたる。物見の砦か。

第5表 県内山内城一覧表①

番号	城名	所在地	比高差	内 容
9	駒返城 こまがへ	阿蘇郡久木野村久石	430m (標高840m)	〔伝〕城主は、久木野氏。島津勢に攻められて落城。 〔現〕「城山」が城地。駒返峠を越えて、矢部に至る山越えルートにあたる。物見の砦か。
10	市下城 いちげ	阿蘇郡白水村岡併	260m (標高750m)	〔伝〕市下大和守(阿蘇家臣)が居城。島津氏に攻められて落城。 〔現〕「城が岳」の岩山が城地。麓に「古陣」「陣内」と千人塚(古戦場跡)。物見の砦か。
11	葦城 あし	阿蘇郡白水村中	150m (標高750m)	〔伝〕城主は、中村惟冬(阿蘇家臣)。惟冬は、天正年間に矢崎城(宇土半島の南端)の城代を勤めた。 〔現〕砦で、御竈門山の一尾根が城地。山腹中の「お花畑」は居住区か。
12	虎口城 こくち	菊池市龍門	430m (標高680m)	〔現〕八方ヶ岳山系の砦。隈部館へ猿返城へ米の山城へ虎口城と繋る。城地は尾根筋の端部で、円錐形状の山。
13	尾平城 おへ	鹿本郡植木町平	210m (標高273m)	〔伝〕内古閑鎮照が天正年間に在城した砦。 〔現〕「城の尾」が城地で、山頂は「城の腰」。昭和46年から採石場になっている。
14	猿返城 さるがへ	鹿本郡菊池町上水野	440m (標高682m)	〔伝〕隈部館を守る砦 〔現〕山頂に大土塁。館に面する南側山腹に土塁を伴う小段が重なる。尾根筋下の谷部に湧水地。隣に「猿返山」。
15	米の山城 こめのやま	鹿本郡菊池町上水野	510m (標高760m)	〔伝〕隈部館の砦。「詰めの城」もしくは「逃げ込みの城」の役目を果たす。(兵站基地の見方もある)。 〔現〕山頂に大土塁、縁に環状列石。山頂直下の山腹に野面積みの大石垣。猿返城へ続く尾根筋に堀切。
16	霜野城 しもの	鹿本郡植木町霜野	170m (標高260m)	〔伝〕内古閑基貞が築城した砦。以後、内古閑氏代々の居城。 〔現〕「城峠」が城地で、鞍部に二重の堀切と尾根筋に3本の堀切。麓に「館(たち)」の丘陵地。集落に「堀田」「おたちしよ」
17	米野山城 こめのやま	鹿本郡鹿央町合里	220m (標高312m)	〔伝〕佐伯氏が居城した砦。 〔現〕米野山が城地で、山頂に平場。帯状の尾根筋に2本の堀切。麓集落に「お花畑」「殿畑」「陣の内」。萩原城(菊水町)とセットをなし、麓集落も共有した格好となる。
18	山内城 やまうち	上益城郡御船町水越	260m (標高578m)	〔伝〕征西将軍泰成親王が、尾坪城(御船町)に在城した際の砦。「高城」の城地は、御船町と甲佐町の境界線上にある。「しろのとっぺん」山頂の平場を巡る同心円状の小段があり、段の縁に土塁を積み。
19	堅志田城 かたしだ	下益城郡中央町中	150m (標高236m)	〔伝〕阿蘇氏の最前線基地で、戦国末に、島津氏の肥後北進に対処した。 〔現〕複合城郭で、2本の尾根筋に遺構が残る。主軸には、7つの平場と13本の堀切。派生部分に3本の堀切。「砦」は麓集落。
20	花の山城 はなのやま	下益城郡豊野町上郷	150m (標高229m)	〔伝〕島津方の付け城で、天正11年(1583)8月28日から12日間を要して築城された。堅志田城を攻めるための陣地。 〔現〕安楽神峠の山頂が城地。
21	大岳城 おおく	宇土市網田大岳	460m (標高478m)	〔現〕城地は、宇土半島の背骨をなす山稜ラインの一頂にあたる。網田～郡浦の山越えルートでもある。

第6表 県内山城一覧表②

番号	城 名	所在地	比高差	内 容
22	雄岳城 おしり	宇土市 網田雄岳	330m (標高348m)	〔現〕大岳城の西側1.2km先の頂。両者はセットをなす。
23	竜峯城 りゅうほう	八代市 興善寺町	510m (標高517m)	〔伝〕鎮西為朝の居城説。 〔現〕砦で、興善寺町～東陽村の山越えルートにあたる。目立った遺構は無い。
24	古麓城 ふるふもと	八代市 古麓町	360m (標高378m)	〔伝〕連山に城が配置されている。名和氏と相良氏の時代に大別される。名和氏時代は、飯盛城・円山城・鞍掛城・勝尾城・八町嶺城。相良氏の時代は、新城と鷹峰城が加わり、麓に城下町が形成された。 「徳の淵」は海外貿易で栄えた。大規模山城。
25	比丘尼城 ひしきに	八代市 野田崎町	295m (標高299m)	〔伝〕城名の由来は、本郷能登守(薩摩)の戦死後、母の妙珍比丘尼が城を守ったことによる。 〔現〕山頂には、仏舍利塔がある。目立った遺構は無い。
26	久多良木城 くどうらふき	八代郡 坂本村 久多良木	160m (標高254m)	〔伝〕久多良木氏(名和氏家臣)と深木宗方(相良氏家臣)の居城説。 〔現〕砦で、城地は「寺山さんの城」。山頂に平場、鞍部と尾根筋に3本の堀切。張り出し尾根に平場と2本の堀切。麓集落に「蔵屋敷」「水くみ坂」。
27	高尾城 たかお	芦北郡 芦北町	245m (標高425m)	〔伝〕城主は、酒井氏勝(相良氏家臣)。 〔現〕砦で、「城平」の山が城地。「城(じょう)」 「城のとっぺん」の山頂に平場と溝。谷間に「倉屋敷」。金の茶釜埋蔵伝説と白米洗馬伝説。
28	佐敷東の城 さふくひがし	芦北郡 芦北町 佐敷	155m (標高161m)	〔伝〕東藤左衛門・新左衛門が城代を勤めた。 〔現〕砦で、「城山」が城地。主軸尾根筋に「本丸」「二の丸」「三の丸」の平場と3本の堀切(1本は、二重堀)。「三の丸」からの派生尾根に2本の小規模な堀切。
29	大尼田城 おおにだ	芦北郡 芦北町 大尼田	330m (標高457m)	〔伝〕城主は、大仁田玄蕃(相良氏家臣)。 〔現〕砦であるが、城地の山頂は、岩山。「城下」谷部が居住地と推定される。白米洗馬伝説と「かぶらや」伝説。
30	久木野城 くきのの	水俣市 久木野町 熊平	270m (標高457m)	〔伝〕久木野四郎・相良四郎・相良頼雄などの居城説。薩摩勢の築城説もある。 〔現〕要害の地で、山頂に平場と斜面部に野面積みの石垣。砦で、地元では「鶴平城」と呼ばれる。
31	宝河内城 たからがわうち	水俣市 宝河内町 渡瀬	260m (標高341m)	〔伝〕相良氏の砦。天正七年(1579)には、東頼兼(相良氏家臣)の居城。 〔現〕要害の「城平」山が城跡。岩山であるが、山頂に平場と主軸尾根筋の斜面に大規模な野面積み石垣。近くに石切り場があり、懸念される。
32	元浦城 もとうら	天草郡 御所浦町 元浦	150m (標高150m)	〔現〕砦で、「城ノ上」の山が城地。山腹に「屋敷」「寺床」。

第7表 県内山城一覧表③



第3回 県内の山城

第三章 調査結果

調査を行った石塁と土塁は、山頂直下の山腹縁（南西南側）に存在しており、昨年度からの継続調査である。これまでに判明した構造については、昨年度分の調査報告書から要点を抽出して加筆する。

(1) 平成9年度の調査結果

薄い表土が被さった石塁は、全て「野面積み」状態で、土塁の両裾部に付随していることが判明した。内縁には、大石の根石列が完全に残っていたが、中途から上部は、全くの欠損状況にある。対して、外縁の一部には、土塁下の山腹にも石塁が繋がって二段構えの構造を呈する区画がある。その始まりは、登山道が土塁を削って跨ぐ所で、東へ長さ13mの範囲に、自然石が山腹に張り付いている。個々の積み石は、未加工の自然石と割石の角礫であった。いずれも、近くの尾根筋に散乱する山石で、切り石が使用されていないのが大きな特徴である。出土遺物は、高台付きの土師碗1点のみに限られる。時期的には、平安時代末のものと推定される。

①土塁の内縁に残る石塁

大石を根石としており、一見すれば「土塁の仕切り」や「土留め」の様に見える。根石の上には、角礫の割石が積み上げられて、非常にインパクトが強い。傾頭に例えれば、土塁の積み土が「あん」で、皮が「石塁」となる。上部は、そっくり無くなっている。意図的に破壊されたのであろう。

根石の中には、横幅1m、高さ0.6mのものがある。類似の大石も数多く、根石列を見る限り、形態は異なるが、その威容は、近世城の石垣と比較しても何ら遜色は無い。山腹縁から突き出た土塁と石塁の高さは、根石の傾斜状況から2m前後と推定される。近世初頭に見られる城石垣の標準的な高さである。

②土塁の外縁に残る石塁

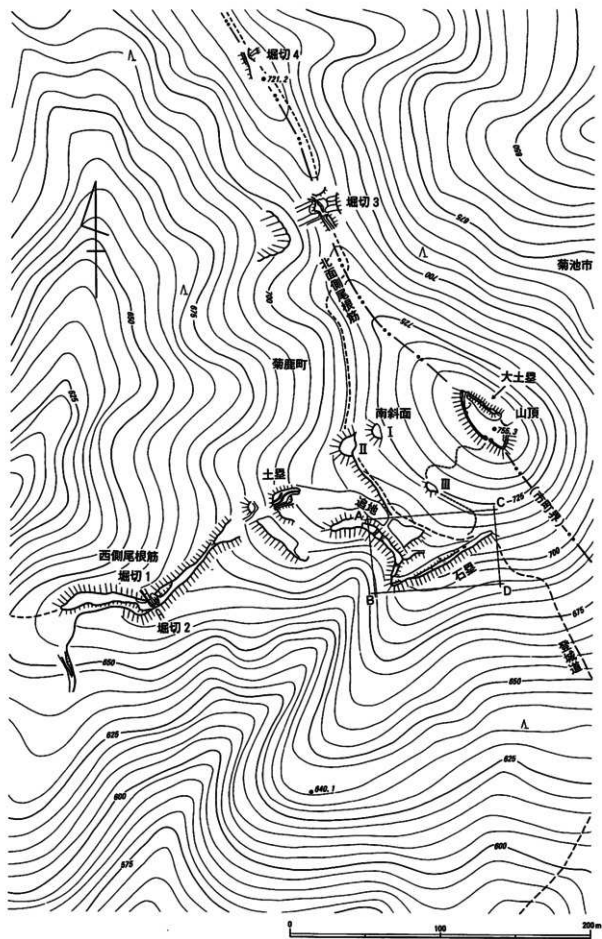
大石が並ぶ根石列の代わりに、奥行きのある偏平な割石や自然石が、直の状態に75cm程、積み上げられている。明らかに、石塁である。しかし、積み石の大きさは、一抱え程度に過ぎず、内縁の根石より、かなり小振りとなる。差異の理由は不明。

③山腹に張り付く石塁

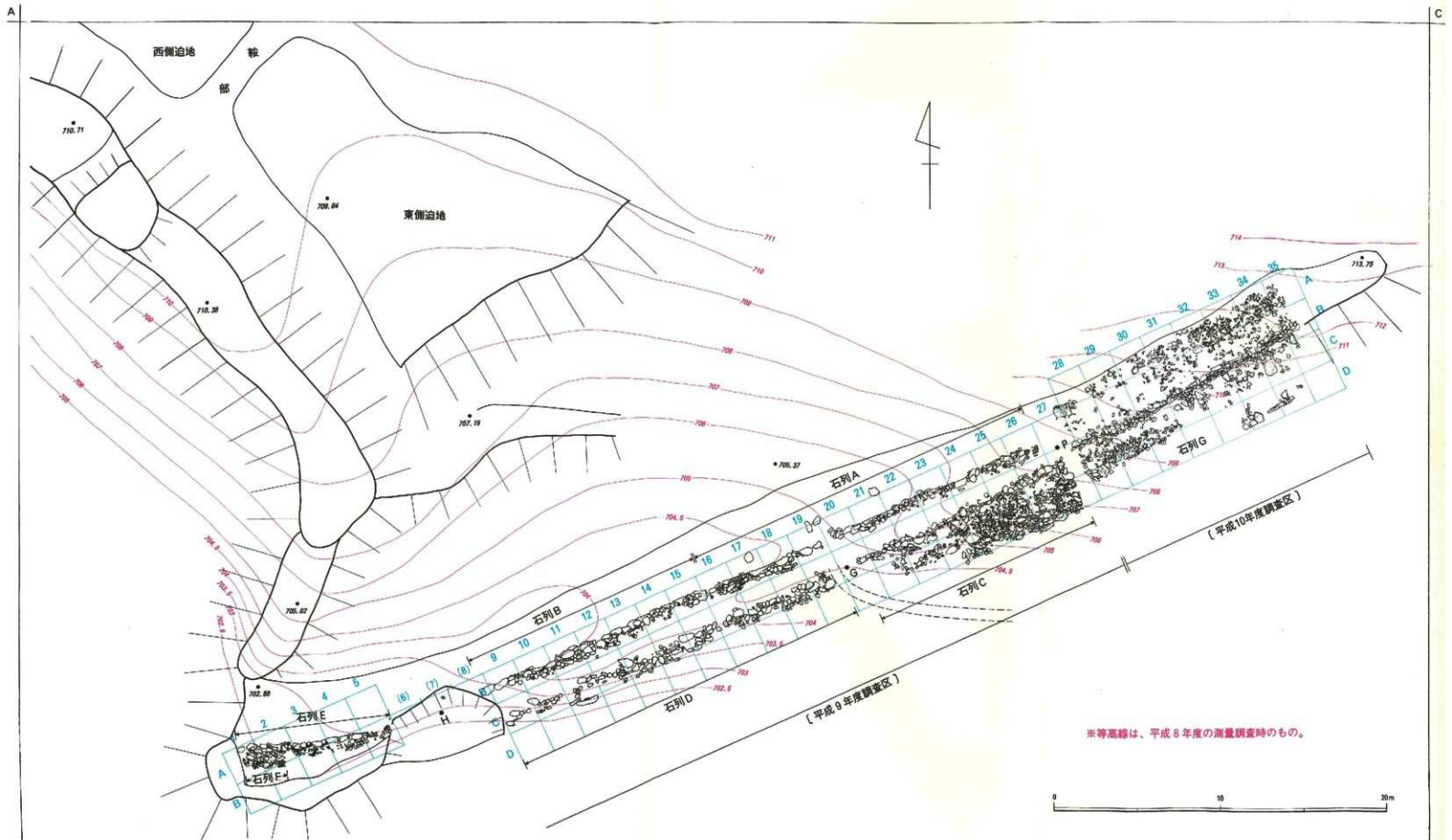
土塁の崩壊石塁が、山腹に流れて堆積したものではない。個々の積み石は、しっかりと山腹斜面に食い込んでいる。ただし、近世城の石垣に見られる様な「裏グリ石」は見当たらない。

④時代は異なるが、古代山城の石塁には、敵方を威嚇するための「張り子の虎」の役目がある。実見したが、長崎県の対馬に築かれた金田城では、尾根筋に残る石塁が、朝鮮半島方面を向いている。唐と新羅の船団が、最初に目にすることを意識して構築されたものである。尾根筋の裏側に、大した石垣はない。

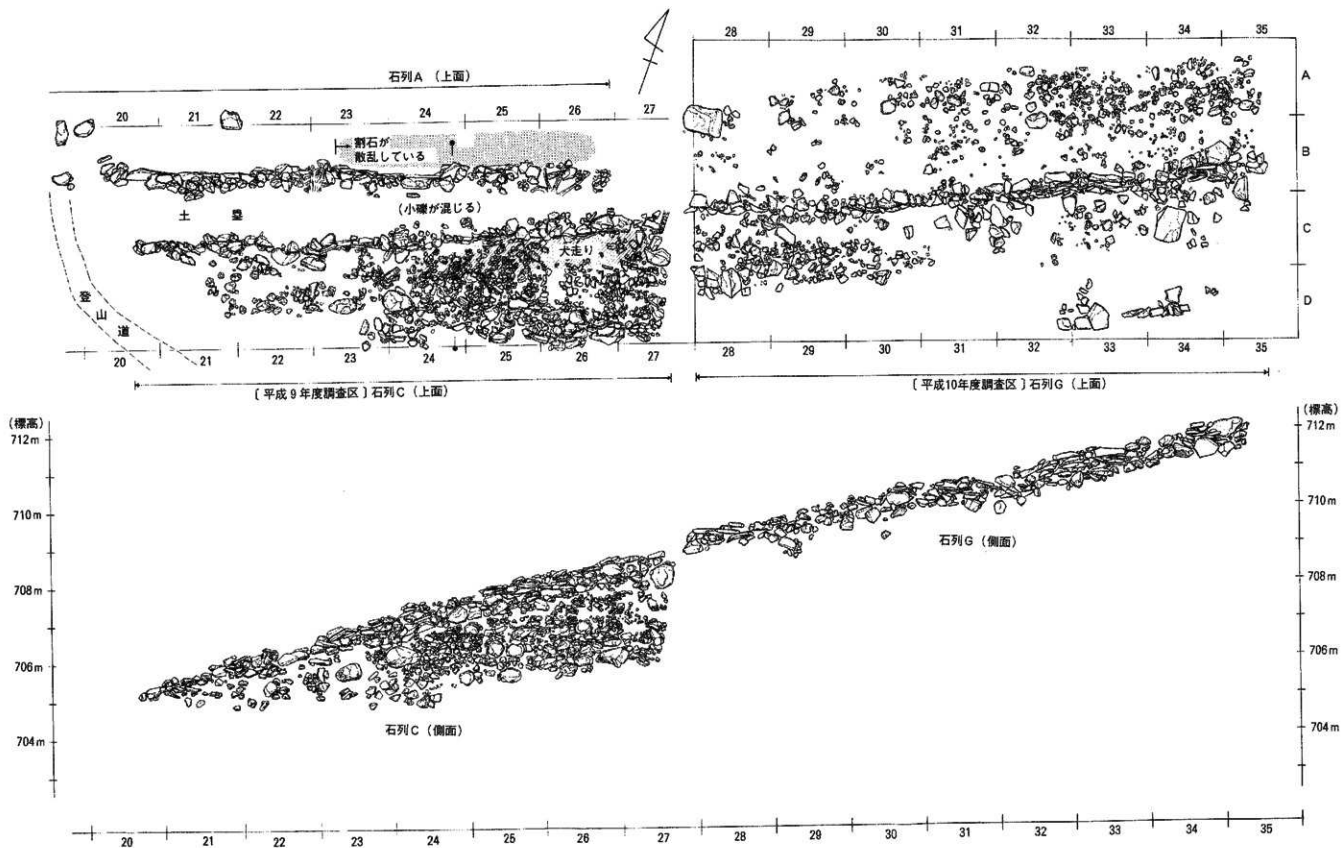
⑤中世城の石塁は、数が少なく、構築範囲も局部に限られる。県内では、高山に築かれた筒ヶ嶽城跡（標高501m・複数の市町を跨ぐが、主体部は荒尾市）が好例である。山頂直下の野面積み石垣は、府本集落側のみに限られる。しかし、米の山城跡は標高755m強に及ぶ高山である。仮に大規模に構築した場合でも、石塁が麓から、どの程度見えるのかという疑問が残る。麓集落の横尾地区から490m強、登城口の上園地区からでさえ、380m強の比高がある。ところが、石塁の外側は、1段目と2段目を合わせても2.2～4.0m幅（斜距離）に留まり、長さも100m程に収まる。恐らく、遠くから眺めた場合、石塁の長さはともかく、高さに至っては、点程度にしか見えなだろうとの疑問は残る。謎の多い石塁である。



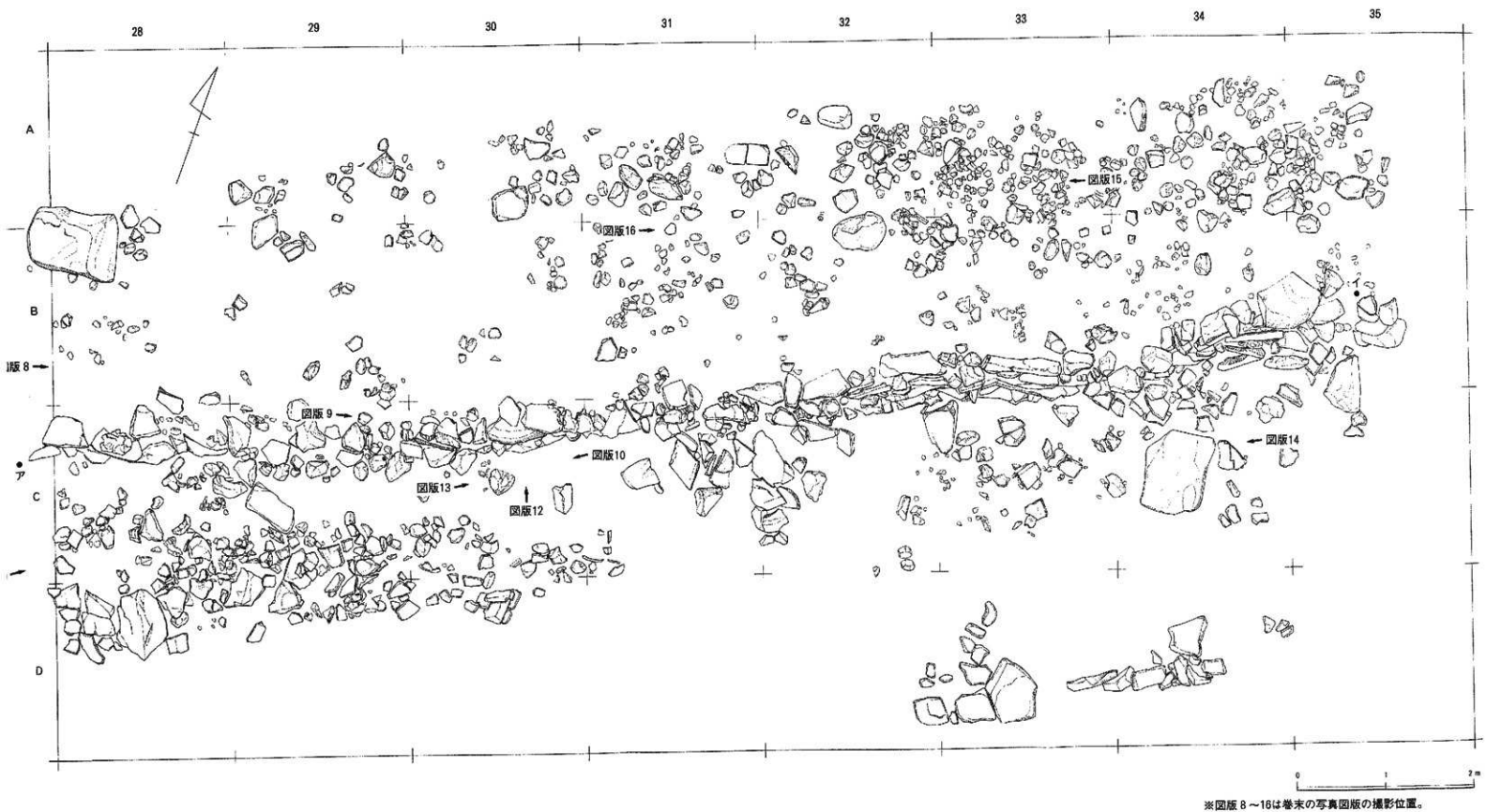
第4図 米の山城跡周辺地形図



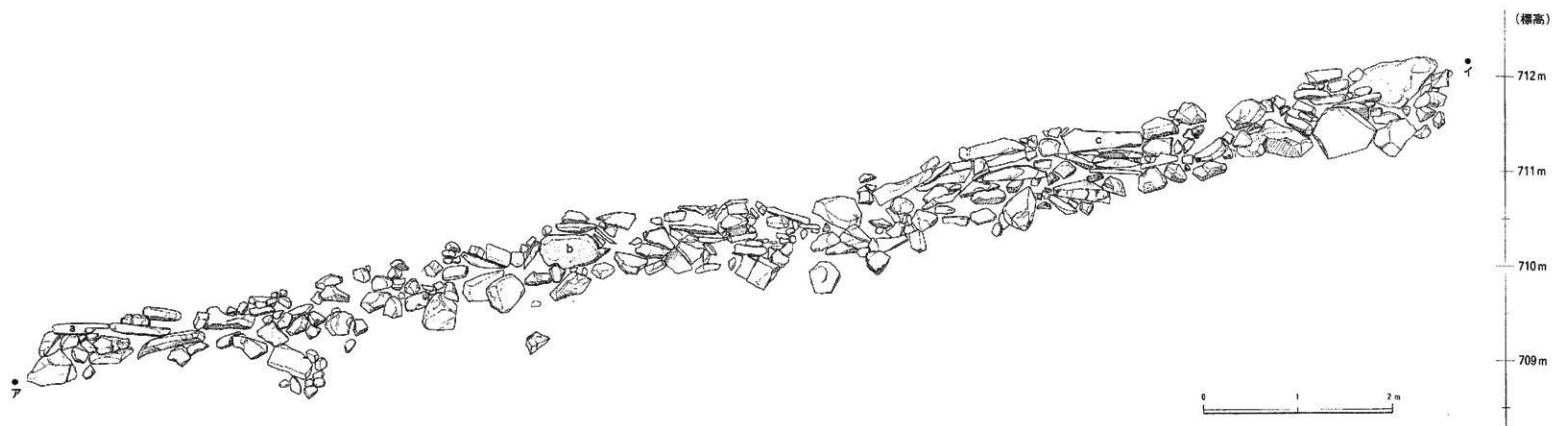
第5図 南西南山腹区域図



新6図 平成9～10年度調査区グリッド設定図



第7図 平成10年度調査区 上面実測図



第8図 平成9年度調査区 石列G 側面実測図



石列G側面 下位 a石付近



石列G側面 中位 b石付近



石列G側面 上位 c石付近

(2) 平成10年度の調査結果

①メッシュを組んで実測を行ったのは、長さ17m分である。この範囲は、昨年度の積み残し分であった。今年度は、石畳のあり方が異なっていた。それまで、土畳の内側にきちんと並んでいた根石は、全く姿を消した。これを見る限り、山縁に築かれた土畳は、消滅した様にも見える。しかし、山腹縁には、3m幅の小礫群が東側へ緩やかに上っているのが、存在を完全に否定することは出来ない。大石の根石列は無いが、内縁の仕切り石（小礫程度の大きさ）が大きく崩れた可能性がある。さらに、小礫群は、土畳の基定部をなす集石の可能性も残されている。土畳の形状が、昨年度と異なっていることも考えられる。

これに加えて、地形的な差異も見逃せない。昨年度の調査区は、土畳の内側に帯状の平地が付随していたために、仕切りの根石列が必要だったのかも知れない。ところが、今年度の調査区は、平地の幅が非常に狭く、直ぐ側まで山腹斜面が迫っているという違いがある。さらに、この事に関連して、近世域ではあるが、富岡城跡（天草郡苓北町）の調査事例がある。検出された「打ち込み割ぎ石垣」の高さは、傾斜地に沿ったものになっている。我々が思い描く台形状の石垣ではなく、尾根筋の上位で低く、下位で高くなる現象があった。米の山城跡の場合も、山腹縁は、東側から西側への傾斜地である。今年度と昨年度の調査区は、両端で10mの比高差があった。富岡城跡に似通った土畳と石畳であったかもしれない。

②山腹縁に面する外側は、上位に限って昨年度と同様な石積みがあった。一抱え程の小岩が積み上げられて、高さ0.5～1.0mの石畳が形成されていた。この構造は、一連のもので変化は無い。しかし、それから下部の山腹に見られる石畳の積み石は、散在の状態に近かった。この点においても、昨年度の調査区とは、大きな違いがある。前述のように、山腹に張り付く石畳は「土畳の崩壊石畳が、山腹に流れて堆積したものではない」と解釈してきた。二段構えの下部石畳という訳である。ところで、今年度の調査では、やや疑問視される向きも出てきた。石畳の構造から、上部が健在で、下部の崩壊が進むのは、矛盾すると言わざるを得ない。今後の検討課題である。

③実測終了後に、調査区をさらに東側へ拡大したが、山腹から再び、多量の集石が検出された。これまでと同様に山腹縁からは、石畳が検出された。土畳の内側は、同じく暖味で、はっきりしない。地形的には山腹は、直ぐ側まで迫っている。

集石の広がり、尾根筋の鞍部近くまで及んでいることが確実となった。個々の石は、偏平なものや、やや厚みを持つもの、大きさまでであった。まるで塞の川原の様相を呈した。

④今年度、遺物は全く出土しなかった。二ヶ年に渡る調査で、出土遺物が高台付きの土師碗1片に限られるのは、余りに特異である。極めて、生活感に乏しい遺跡と言えよう。標高750mクラスの高山城に、これだけの石畳を配列しているにもかかわらず、今のところ、^{まがひ}宿直の痕跡も伺えない。しかし、平成8年度の縄張り調査で判明した様に、この遺跡は山城としての体裁を完全に持ち合わせていることも加筆したい。山頂の大土畳や尾根筋を断ち切る堀切は、セオリー通りの遺構である。本文中でも述べた様に、石畳自体は、有事に直面で構築された急ぎえのもので、実戦に使用されなかったという考えは、捨て難い。

⑤高山に築かれた山城だけに、調査には多くの困難が伴う。しかし、この謎の石畳を解明するためには、さらなる調査が必要である。調査区一帯は、昭和40年代に、櫓の植林が行われたが、それまで、城跡は一面の原野であったと言う。植林時を除けば、中世からの時の流れが止まった遺跡で、資料的な価値は極めて高い。後世の土地利用は無く、地形の造成はなかった。

限部館を核に、周辺の高山に配置された「猿返城跡」「米の山城跡」の持つ意味は、大なるものがある。戦国時代後半の「面の支配」考える上で、貴重な遺跡である。

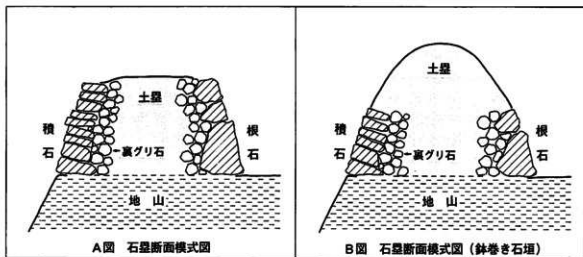
第Ⅳ章 ま と め

(1) 米の山城跡は、お碗の形をした山頂部分を中心に築かれており、尾根筋端に突出した山の有様は、遠くからでも良く目立つ。山頂の標高は、750 mに達しており、高山城の山城としても異例の高さにある。本報告書では、同一山系にある隈部館跡の兵站基地と推論しているが、謎の多い城跡である。

調査区は、山頂直下の山腹（山頂との比高差44m）に位置している。ここは、全体が西側への緩傾斜地である。地表面は、多少の起伏があるものの、上位部分は、平場の様相を呈する。一部に、造成された痕跡も伺える。北西端から先に延びる主軸尾根筋は、瘦せ馬の背の様に变化しており、そこに刻まれた堀切の存在とあいまって、この区域は、城跡地として相応しい状況にある。戦前までは、一面の草場であったが、今日、櫟の植林地となっている。問題の石塁は、この区画の南縁にある。自然石を積み上げたもので、同一区画にある土塁とセットをなす様に見えるが、少なくとも二つのパターンが考えられる。

一つ目は、土塁が、石塁を築く場合の基礎部分に該当するという見方である。本文中では「石垣内部のあんこ」と表現した。この場合、石塁の芯をなすもので、土壁の側面に、少量の裏格里石で、自然石を積み上げた事になる。したがって、貼り付けたと表現した方が適切かも知れない。高さは、さ程無く、平場に突き出た石壁（土壁をイメージしたもの）の様なものであったと推定される。谷間から吹き上げる風避けと、平場からの土砂流出を防止するための施設であろう。この考えを断面図で示したものが、A図である。

一方で、B図の様な変形構造も考えられる。「鉢巻き石垣」の様なもので、下部に根固めの石列があり、上部に土塁が積まれたもので、残存する土塁の幅からすれば、この考えも捨て難い。現況からすれば、ある時期に、土塁の上部は大きく崩れて斜面部に落下したことになる。ただし、A・Bの場合、斜面部に落下した積み石の多さが気になる。



そこで、二つ目の考えが出てくる。斜面部まで石塁が下る場合である。しかし、この場合、近世城に見られる「打ち込み割ぎ石垣」や「切り込み割ぎ石垣」と異なり、イメージ的には、古代山城の石塁に近いものと考えられる。C図・D図は、事例として示した対馬の金田城跡の石塁である。前者は二の木戸、後者は三の木戸に築かれたものである。なお、E図は、わが国の古代山城のルーツとされる中国・吉林省集安の丸都山城の石塁で、F図はこれらの模式図である。ただし、米の山城跡がこの状態であるなら、さらにもっと多量の積み石と裏格里石の散在があってよさそうである。ところが、もし、そうであるなら、米の山城跡の実年代が、問題となる。当初、推論した様に、古代山城の転用という考えが再燃し、問題は複雑化する。

正直なところ、現時点では、どちらとも判断の付けようがない状況にある。今後の調査結果を待ちたい。



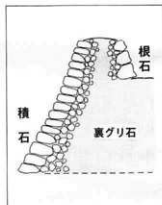
C図 金田城跡・二の木戸〔長崎県対馬〕



D図 金田城跡・三の木戸〔長崎県対馬〕



E図 丸都山城跡〔中国・吉林省集安〕



F図 丸都山城石壁模式図

(2) 米の山城跡は、本体の隈部館から大きく後退した場所に築かれている。このことに関して、同じ菊鹿町に所在する古代山城の鞠智城跡が参考資料となろう。約1300年前、東アジアの国際情勢が非常に緊迫する中、国家防衛のために急速、築かれた城塞の一つである。古代山城の数は、国書に城名を見るもの11城、考古学的には26城前後とされる。唐と新羅の連合軍の進攻に備えたもので、当時の都が近畿地方にあったため、西日本地方の海岸線沿いに、その多くが分布している。水際で、敵勢を抑え込む作戦であった。

ところが、鞠智城は、大宰府（九州統治の中心地）から約80km入り込んだ内陸部に位置しており、上記の考えに当てはまらない。その理由については、諸説があるものの、今日、兵站基地とする見方に落ち着いている。城塞としての体裁は備えながらも、有事の際には、安全圏内の鞠智城から大野城（福岡県）や基肄城（佐賀県）の frontline 基地へ、兵士・武器・食料を補給する役目を荷なうというものである。

この事を中世城へも拡大解釈して、詰めの城と見なされる米の山城も、猿返城を中継基地とした「隈部館の兵站基地では」という考えに至った。そうでなければ、正直言って、城の存在理由を見い出すことが出来ない。米の山城は、余りに奥まった山中にある。類例は、球磨郡上村ぐらいである。この場合、上村城と永里城は尾根続きで、両城を往き来する所要時間は、約45分。今も、中世の尾根道が残り、両城には、大規模山城としての遺構が残っている。麓集落との関係から、前者が本城、後者が兵站基地と推定される。

(3) 隈部親永は「肥後の国衆一揆」で、中心的な役割を果たした武将である。調査者は、親永が、万一を想定して（隈部城から本拠地の上永野地区へ後退して、隈部館や砦での戦い）、米の山城に石壁構築などの根柢入れをしたのではないかと考える。しかし、一揆の流れは、菊地の隈部城（当時の隈部氏の本城）から、西方向の城村城（山鹿市）へ移り、最後は、さらに西下して田中城（三加和町）の落城で幕を閉じた。上永野地区が実戦の舞台となることは無かった。大石壁を有する米の山城から遺物が出土しないのも、頷ける。

【肥後国誌】の記述によれば、一揆前のこととして、島津氏から攻撃を受けたことになっているが、伝承の域を出ない。

(4) 城名の由来となった「白米洗馬伝説」について考察する。城に水が豊富にある様に見せかける作戦で、伝説は、米の山城に限らないが、当城の場合、大石塁の存在から想像が膨らむ。実際の所、太陽の光を反射して白く光る積み石を、白米で表現したものではないか。菊池平野から遠望すれば、標高750mもある米の山城の石塁も、白米の様に見えるのかも知れない。伝説には、その元となるものが存在したはずである。例えば、当町で有名な「米原長者伝説」の一節は、日食に関係するのではとの見方がある。田植えをその日の内に終わらせるために、長者が、一旦、沈みかけた夕日を金の扇で呼び戻した有名な話は、日食現象で説明がつくというものである。確かに面白い推論で、参考となろう。

(5) 高山城に築かれた山城を「山の城」、麓の山裾に築かれた城を「里の城」と見なす考えがある。典型的な事例は、荒尾市の筒ヶ嶽城と梅尾城のセット関係である。前者は、標高500m、大規模な「詰め」で、最終の戦い（白兵戦）が行われる場所である。平時は、宿直の兵が配置されていたことが文献記録から伺い知れる。後者は、標高50m前後の山城で「府本」と呼ばれる麓集落（中世の城下町）の中にある。梅尾城は、集落のシンボリックな存在と見なされる。本報告書では、県内に所在する高山城の山城をリストアップしたが、その多くが「山の城」なのであろう。その成立時期は「面の支配」が成立する戦国時代と推定される。

(6) 豊臣秀吉が、国衆一揆後に行なった関係者の処分は、本文中でも述べた様に、非常に厳しいものであった。当然、隈部氏の城館は、徹底した破城が行われたはずである。それを裏付ける様に、米の山城の大石塁は破壊され、猿返城の小段は、土塁が崩され、空堀部分が埋められている。ところが、その一方で、本拠地の隈部館は、庭園や礎石建物の痕跡が残っているという矛盾がある。これについては「破城の仕方に決まりがあるのでは」との考えに至った。

つまり「石垣は、用をなさぬまで壊す。土塁は、大方、崩して堀切や空堀を埋める。建物については完全に撤去する」というものである。この場合、建物が問題である。どうやら、礎石を掘り起こすまでは、しなかったらしい。石垣でも、礎石はそのままの状態が放置されたことに繋がる。建物の礎石は、埋め込んでしまえば、外観上、さら地となる。それで「よし」とされたのであろう。庭園に至っては、元来が嗜好的なもので、生活に直接、結び付かないことから、対象外とされた可能性がある。破城の目的は、城が再利用できないようにするためであったことから、合点が行く。

(7) 隈部館からは、石造りの限界を伺い知ることができる。礎石建物で外構工事にも、石が多用されている。さらに、近世的な色彩の濃い斜型の虎口には、野面積みとはいえ、大石を使ったグレイドの高い石垣が積まれている。ところが、主郭の縁部は中世城そのものの構えのままである。（伝）島屋区画の土塁側面には、小石で構成される野面積みの石垣に留まっている。最も、象徴的なのは、主郭南面の大堀切で、館跡の状況からすれば、堀壁に石垣が積まれてよさそうである。しかし、一帯に積み石の残部は全く見当たらず、崩壊箇所は、グリ石も皆無であるため、土塁のままと判断した。

城が完全に機能を停止したのは、親永が肥後国衆一揆に失敗した天正15年(1587)である。この時期まで、肥後の中世城に近世的な石垣は、存在しなかったことを示す事証であろう。同じく、瓦が一片たりとも出土していないので、建物の屋根は茅葺であった事がわかる。同時期の志志田城（中央町）も、隈部館と全く同じ状態であることを合わせて記したい。米の山城の石塁も、高さの余り無い、野面積みのもので、近世的な石垣とは異なる。

写 真 图 版



図版1 狼返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景（下永野地区から望む）



図版2 狼返城跡・米の山城跡 遠景（高池地区から望む）



図版 3 米の山城跡 遠景



図版 4 猿返城跡 遠景



図版 5 平成 9 年度調査区 全景



図版 6 平成 9 年度調査区 石列 A (グリッド25付近)



図版 7 土塁より南西側下方・石列Cを望む



図版 8 平成10年度調査区 グリッドB-28より上方を望む



図版9 平成10年度調査区 グリッドC-29より上方を望む



図版10 平成10年度調査区 グリッドC-30より下方を望む



図版11 平成10年度調査区 グリッドC-28付近



図版12 平成10年度調査区 石列G側面 グリッド30



図版13 平成10年度調査区 石列G グリッド30より上方を望む



図版14 平成10年度調査区 石列G グリッド34より下方を望む



図版15 平成10年度調査区 グリッドA-32付近



図版16 平成10年度調査区 グリッドA-32付近より上方を望む

報 告 書 抄 録

書 名	米の山城跡Ⅲ ―腰部館関連の砦跡―
シリーズ名	菊鹿町文化財調査報告書 第6集
編 著 者 名	大田幸博 富田弘海
編 集 機 関	菊鹿町教育委員会
所 在 地	熊本県鹿本郡菊鹿町下内田713
発行年月日	1999年3月31日

所収遺跡名	所 在 地	調査期間	調査面積	調査原因
米の山城跡	熊本県鹿本郡菊鹿町上永野	1998年4月10日 ～ 1999年3月10日 (報告書作成を含む)	128㎡	学術調査

遺 跡 名	主な時代	主 な 遺 構
米の山城跡	戦 国 時 代 (推定)	・調査区には、大石塁と土塁 ・城跡には、大土塁・堀切・環状列石など。

菊鹿町文化財調査報告 第6集

米の山城跡Ⅲ

隈部館関連の砦跡

平成11年3月31日

〔発行〕

菊鹿町教育委員会

〒861-0406 熊本県鹿本郡菊鹿町大字下内田713

☎ 0968-48-3115

〔印刷〕

㈱大和印刷所

〒862-0931 熊本県熊本市戸島町920-11

☎ 096-380-0303

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『菊鹿町文化財調査報告第6集 米の山城跡Ⅲ』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名:菊鹿町文化財調査報告第6集 米の山城跡Ⅲ—限部館跡関連の砦跡—
発行:山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日:2025 年 7 月 7 日